

環境整備によるQOLの向上に関する研究



【池袋キャンパス】 ヒューマンケア学部 柔道整復学科 教授

牛込 彰彦 Ushigome Akihiko

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 障害児・ストレス・アイトラッキング



研究の概要

SDGs 目標 3 : すべての人に健康と福祉を

生物は絶えず環境との応答によりその「生」を維持している。これは、全ての生物に言えることで、人間も例外とは言えない。環境を整えることで、人々のQOLは向上する。

本研究では、現代社会における人間を取り巻く環境を生理学的指標を用いて評価し整えることで、当事者のQOLの向上を目指すものである。

1) 障害児における取り組み

ストレスの低減は、QOLの向上に繋がる。障害児は感情の表出が難しい者も多く、周囲の他者が本人のストレス状態を知ることが困難である。しかしながら客観的な数値をもって、周囲の者が障害児のストレス状態を知ることができれば、環境を整えることを通して、ストレスを低減しその結果、障害児のQOLの向上を望むことも可能となる。ストレスを客観的な数値として知る方法としてはコルチゾール、アミラーゼの測定や脳波の測定などがある。最近では、リアルタイムで脳波を測定することによりストレス度を計測することも可能になってきている。

本研究では、障害児のストレスをリアルタイムで測定することによって、環境としての快・不快刺激を特定し、その結果から環境を整えることを通して、障害児のQOLの向上を目指すものである。実際にはストレスにかかわる環境刺激のうち、快刺激を増やし不快刺激を減少させることで、ストレスの低減につなげる。

療育として、触覚、視覚、嗅覚等の五感を刺激する方法が療育施設で実施されているが、その効果についても検証する。

2) 幼児・児童における取り組み

本研究では、幼児・児童が、何に注目して日々の生活における情報を処理しているかを、その視線を調べることにより検証し、より良い環境を創出することを通してQOLの向上につなげることを目指すものである。

近年では、教育の現場に様々な特性や属性をもった幼児・児童が在籍する。それらの認知の傾向を知ることが出来れば、より良い保育・教育環境を整えることが出来ると考える。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

環境を整備することで、当事者のストレスの軽減や特性を生かすことが可能である。このことは当事者のQOLの向上とともに、社会全体の公衆衛生や労働生産性の向上に寄与できる可能性を秘めている。特に保育・教育現場での教具・教育内容、また病院等における患者のQOLの向上に貢献できると考える。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

【科研費（基盤研究C）】

- ・「重複障害における生涯学習支援に向けた感覚を生かした活動の実証的研究：日英比較研究」
- ・「困難を抱える子どもを包摂する多重感覚発達支援環境の実証的研究：日英米の環境比較」
- ・「発達障害支援における生理学的指標評価に基づく支援モデルの構築」